



「17」／椎名林檎—詩羽（水曜日のカンパネラ）



青森市子どもの権利擁護委員 関谷 道夫



now I'm seventeen

(今 私は 17 歳)

my school is in the country

(田舎の学校に通っている)

students wear trainers

(みんな同じジャージを着て)

read the same magazines

(同じ雑誌を読んでいる)

「セブンティーン」の文字は、青春真っ只中の甘酸っぱさを感じさせます。妙に、こころを掻き立てます。同名の女子中高生向けファッション雑誌もありました。今や、18歳になれば成人になってしまいます。モラトリアム（大人になるための猶予期間）の時代はアツという間に通り過ぎていきます。

17歳といえば、思い出すのは、若い頃聴いていた沖縄生まれのシンシア南沙織のデビュー曲の「17才」。“誰もいない海”で始まって“私は今生きている”で終わります。こちらは、暖かい澄み切った浜辺と青空を連想し、青春の眩しさや切なさが詰まっています。未来への希望ある展望と圧倒的な自己肯定感が広がっていました。時代が求めていたのが、こうした明るく健康的な風景でした。

もう一つ思い出すのは、2014年、17歳の若さで入水自殺して、鮫沖の海で発見された女子高生のことです。いじめが関与する重大事態として、青森県いじめ防止対策審議会委員として調査を実施し、報告書をまとめました。娘に先立たれたご両親の切ない気持ち、自他に対する行き場のない憤怒は、痛い程伝わってきました。報告書でも触れましたように、本来、青春を謳歌しているはずの17歳の女子高生が、いじめ・仲間外れ・孤立孤独・成績低下・うつの気分・自殺念慮・摂食障害など、あまりに多くの複合するリスク要因に囲まれて生きていました。しかも、その一つひとつが決して軽いものではありません。一人で、多くの困難と必死に闘い、刀折れ矢尽きて、最期に一つの選択を決心したのだと感じました。私も「生きているのが、死ぬよりも辛い」と考えていた時期がありましたので、同じ心境の子どもがいたとすれば、「生きていることが大事」「何とかなるよ」「変わるもんだよ」というメッセージを贈りたいと思います。自殺の選択肢だけはゲームのようにリセットできません。遠慮なく援助希求メッセージを発信して、自分だけのサポート体制をつくってほしいと願っています。

松岡茉優が主演を務め、芦田愛菜が共演するドラマ『最高の教師1年後、私は生徒に■された』の第5話が放映され、クライマックスシーンで詩羽（うたは：水曜日のカンパネラ）演じる瑞奈が熱唱したのが、椎名林檎の「17」でした。英語の歌詞のまま歌っていました。ドラマを象徴するような曲となっていました。

詩羽は、ドラマの登場人物の中でも、**異彩**を放っています。ロピアス・刈上げの髪型・オンザ眉毛の前髪・奇抜な衣装など、今の学校では決して許されないでしょう。古稀を過ぎたものにとっては、正直、異質さを感じない訳ではありません。

が、ちょっと考えてみる。そんな自らが瞬間的に排除してきた感性&こころ馴染めない考え方の中に、自分が抑圧してきた価値観や否定してきた生き方が隠れている、これからの生涯発達の起爆剤・資源が潜んでいる、と考えるのは臨床心理士特有の思考様式です。

I see the same faces in school

(毎日周りは同じ顔ばかり)

& they say that I am different

(そして彼らは口を揃えて言うの。「お前は変だ」って。)

I think it's an honour

(私はそれを誇りに思っているの)

I say it's an honour to B different

(だから言ってやるの「変わってるって素敵でしょう?」)

I can't go their way

(みんなと同じようにはなれないもの)

自分の価値観や人間観を超えたもの、自分とは異質なものに対して、たとえ共感はしなくてもオープンな姿勢で向き合いたいと願ってきました。普通なら感覚的に排除する生き方を柔軟に受け止めていくのが、心理臨床家の資質だと思っています。

教育者や対人援助職には、たとえ自分にとって不利益だと思っても、自分を守ってきた思考・行動パターンを破壊しなければいけない時があります。自分の思考回路を、必要に応じて変化させていく弾力性と、先の見えない**不確実性への耐性**が必要です。

「17」では、「**みんなと違うのは誇りだ**」「**同じにはなれない**」と呟き、周りとのギャップ・異質感・距離感を感じながらも、一方で、思いのままには何処へも行くことも出来ずに、放課後の「**自分の時間**」を、一人祈りながら、過ごしている少女の姿があります。周りとの障壁を感じながらも、必死に生きている17歳。実は何処にでもいる**サバイバー**(survivor)です！

いじめによる自殺や悲惨な児童虐待を見ていると、子どもであっても、**生きていくための戦略、戦術、方法、ツール、資源**を身に付けて置かなければいけない！と感じる時があります。**誰がそれを教えるのでしょうか!?**

I go home alone

(私は一人で帰る)

and have dinner in my sweet home

(割と気に入っている家で夕食を食べて)

praying again again & again ("...peace...")

(そして何度も何度も祈るの… “平穏・安らぎ” …)

(次回は最終回。ちょっと渋く中島みゆき「ファイト」です。)